
魔法少女リリカルなのはsts ~機動六課のどたばた騒ぎ~

黒龍妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは s t s 機動六課のどたばた騒ぎ

【Nコード】

N36710

【作者名】

黒龍妃

【あらすじ】

目立つ事や面倒事は嫌いなんだよ……。だから、俺は管理局で荷物と呼ばれようが、役立たずといわれようが関係ないの……。へ？辞令？俺に？……。な！？転属！？次の配属先は……。機動六課あ！？……。ハア……。また面倒くさい事になりそうだ……。

第一話 転属（前書き）

ども、黒龍妃です。

ふと笑い満載（？）な作品が書きたくて、書きちゃいました。

読者様におもしろおかしく読んで頂けたら嬉しいです。

「こんな機動六課があっても良いじゃない」がコンセプトの作品。

では、お楽しみください……………

第一話 転属

時空管理局……それは数多の時空世界の平和を護る組織。

そんな組織が俺の職場……。

「ふあゝ。あゝ、退屈」

ども。時空管理局雑務課のキスミ・ハートウエルです。

俺は今、自分の机で今日は何しようかな？とか考えてるんだけど……。

え？雑務課って何だ？って？

雑務課ってのは、読んで字の如く、管理局内の雑務をする課さ。

局内の掃除とか、寿命が尽きた照明交換とか……ぶっちゃけ、仕事無いんだけどね。

掃除は清掃業者のオバチャン達がやってるし、照明だって気付いた人がやってる。

だから、俺の所には仕事が回ってこないのさ

ちなみに、この課の人間は俺一人だけ。

入局後、色々な部署を回ったが、ドコに行ってもお荷物扱い。

でも、何か不始末を起こした訳でもないので管理局側も「お前、クビ」とは言えず、このセクションを創り、俺を押し込んだのだ。

ま、体の良い厄介払いだね。

俺としては殆ど仕事せずに給料貰えるから願ったり叶ったりなんだけど……フヒヒヒヒ

コンコン…

ん？誰か来たみたいだか。

ココに誰かが来るなんて珍しい……。誰だろう？

「はいはい。今、開けますよ」

扉を開けると、しかめっ面のオッサンが……。げ！！ダン三佐……。このオッサン。名目上、俺の上司だけど、ちよくちよく「辞める気になったか？」と聞いてくるのでウザい。

まあ、俺が煙たいってのは解るけどさ。こんな天国の様な職場、誰が辞めるか！！

「これはこれは、ダン三佐。この様な所に、何用で？」

「フン……。本来なら貴様の様な役立たずに会いたくはないが……。コレを渡しに来た」

ん？何だ、この紙。

「なになに……。？辞令？……。……。ダン三佐、コレ、マジ？」

「ああ。コレでやっと私も貴様から解放される。さっさと荷物を纏めて出て行け」

あ、言いたい事言っでどっか行きやがった。

まあ良い。オッサンの顔なんぞ長々と見たくはないからな。

しかし、俺に辞令とは……。局は何考えてんだろ？

「そして俺はココに居る……………」

俺の前には新設されたばかりの隊舎がそびえ立つ。

機動六課：八神二佐率いる少数精鋭のエリート部隊。ロストロギア、通称レリックを回収・封印を専門とする部隊だ。

いや、アレだね。こんな予算あるなら雑務課にも少し回して…………無理だな。

【マスター。バカな事を言っていないで、さっさと挨拶に行きますよ】
「バカな事って、何気に酷くね？」

【そうですか？】

俺が誰と話してるかって？

にゅふふ〜 何を隠そう、俺のデバイス『ムーン・アクトレス』だ。インテリジェントデバイスで女性型AIを搭載。待機モードでは腕輪型で戦闘時では……………ま、コレは追々。ムーンは基本的には良い奴なんだけど、たまに冷たいんだよなあ……………。

「フフ…………。そんな奴でも、本当は俺にベタ惚れなのを知ってるんだぜ」

【…………何をまたバカな事を………………。とうとう頭が沸きましたか？】

「あれ！？心の声か！？」

【普通に声に出してましたよ】

呆れるムーン。

ま、いつか。さて、今回俺の上司になる八神二佐に挨拶でもしときますか。

「……………」じじ、ドコよ?」

【さあ?】

部隊長室を探して隊舎内をウロウロしてたんだけど……………ヤヴァい

……………完璧に迷子だ。

アレだね。ココは一つ、迷子のお知らせ放送でも流して……………

……………貰えるかなあ?

【無理でしょ】

「あれ!?心を読まれた!?!」

【細かい事は気にしたら負けですよ】

むう…。何か納得出来ねえなあ……………。

あ、女性発見!!

これより第一次接近遭遇であります!!

「あの、すみません」

「はい?」

振り返った女性……………ん?どっかで見た事ある様な気が……………。

「あの、どうかしたんですか?」

おっと、思考と言う名のディラックの海に沈んでしまったか。

自分から声を掛けておいて、女性を放置など紳士としてあるまじき行為。

「失礼。本日付けでコチラに配属になったキスミ・ハートウェルです。八神部隊長に会いたいんですけど、部隊長室は……………」

「ああ、部隊長室ならコチラです」

笑顔で案内してくれる女性。

ええ娘やなあ。……でも、やっぱりどっかで見た事あるんだよなあ……。誰だったかなあ。

「あ、自己紹介が遅れました。機動六課でスターズ分隊の隊長をします高町なのです」

「はえ？高町……なのは何？」

あーっ！！思い出した！！通りで見た事あると思ったんだよ！！管理局のアイドル的存在で、不屈のエースとかエース・オブ・エースとか管理局の白い悪魔とか呼ばれてる人だ！！いや、超有名人じゃん。サイン貰おうかな？

「コチラが部隊長室です」

お、やっと着いたか。

「案内、ありがとうございます」

「いえいえ。じゃあ、私はこれで……」

去っていく高町隊長。うーん、そんな姿も凛々しいぜさて、部隊長に挨拶、挨拶と。

コンコン…

「はーい。誰や〜？」

「ちわ〜。陳来軒です〜。ご注文のラーメンとチャーハンお持ちしました〜」

「あゝ、やっと来たかあ めっちゃ楽しみやったんよ…《ガチャ》
《……って、誰も出前なんて取ってへんわ!! 《スパアンツ!!》」
「べふっ!?!」

おお!!まさかハリセンを使つてのノリツツコミとは……

「八神殿……お主、なかなかやるな？」

「いやいや……貴殿こそ……」

「クツクツクツクツ……」

おゝ 今度の上司はノリが良さそうだな

「……で、誰なん？」

「まずはコレを……」

とりあえず辞令書を見せときゃ分かるっしょ。

「ふむふむ……うん。話は聞いたるよ。確か前は……」
「雑務課です」

「ああ。ソコや……で、何で六課に配属されたん？」

「さあ？それが自分でもサツパリ謎で……」

「まあ、リンデイさんの推薦みたいやから信用出来る人なんやろう
けど……あ、名前は？」

「キスミ・ハートウエルです。階級は三等空士です」

あれ？八神部隊長が固まつてる。

「三等……空士？」

「はい」

「ちよっと待ってや!?!キスミ君、何歳なん？」

「29ですけど?」

あ………また固まった。

あんなに口を開けて…アゴ外れないのかなあ?

「……………29!?!どう見ても私らと変わらん位にしか見えへんやん!!それに、その歳で未だに空土って、どういう事や!?!ああああっ!!ツツコミ所が満載やん!!」

八神部隊長。うがあああつ!!とか叫びながら髪を振り乱さないで下さいよ……………。
仮にも年頃の女の子なんだからさあ……………。

「外見は良く言われますが、童顔なんです。階級については今まで特に功績をあげた訳でもなく、部署の厄介者・お荷物隊員として扱われていたので至極当たり前なのですが……………」

「ア……………アカン……………。なんでリンディさんは、こんな人を推薦してまで六課に入れたんやろか?」

「あの人の考えてる事はただ一つ……………『面白そう』だからじゃないですか?」

ハア…。あの人はいつもそうだ。俺をからかつては愉しそうに笑っていた。

「キスミク……………さんは「呼びやすい方で良いですよ」ありがとな。キスミくんは、リンディさんの事を知ってるん?」

「はい。以前、アースラにも配属されましたから」

「アースラに!?!」

「はい」

「で、でも私見た事ないで!?!」

「そりゃ、自分雑務してましたから。艦内の掃除したり、整備班と一緒に整備したり……ま、裏方ですね」

「……………そら見掛けんわなあ」

「でしょ？」

あら…八神部隊長が頭を抱えてる……。

「で、自分は機動六課で何をすれば……………？」

「あゝ、せやなあ。とりあえず今まで通り、雑務任せてええか？隊舎の清掃とか寮の方の手伝いとか……………」

「了解しました」

こうして俺の機動六課での生活が始まった。

第一話 転属（後書き）

ども。

読んでくださってありがとうございます。

さて、今作品ですが……バトルなんて殆どありません
主人公は現場に出る事がありますが、全て巻き込まれての結果でございませぬ。

『もしも』の機動六課の日常風景……今後も楽しんでください。

御意見・御感想を心よりお待ちしております。

では……またお会いしましょう……。

第二話 機動六課

ども

俺が機動六課に配属されて一週間が経ちました。

今日も雑務に精を出すキスミ・ハートウエルです
ん？雑務なんて楽だろって？

ワイー！！バカ言っちゃダメだぜ？

雑務って言っても結構忙しいんだから……。

機動六課隊舎内の清掃（主に清掃業者のオバチャンとの談笑）、食堂での料理の盛り付けと皿洗い（つまみ食い含む）、寮の風呂掃除と備品の買い出し・補充（寮母のアイナさん、美人だよなあ）……
あれ？

ゲフンゲフン……。っー感じで、結構忙しいのだ！！だから……

「雑務舐めんなよおおっ」

ビシィッ！！と指差して振り返ると……

「な……何を叫んでるんだ？キスミ」

ギヤアアアアアアアツ！！

指差した方向に、我らが機動六課、ライティング分隊副隊長のシグナムさんがあああああつ！！！！

「いー！！いえー！！何でもありませんー！！」

「そ、そうか。いつも大変だな」

ここに来て一週間、意外と他の隊員とも打ち解けて会話も普通に
なしてるぜ
ちなみに隊長クラスの人達も、普通に「さん」付けて話が出る位
さ

クツクツクツクツ……本局の男性局員どもめ、羨ましいだろう。

「いえ、自分にはこの位しか皆さんのお役に立てませんから」

「いや、お前の様な裏方が居るから前線の私達も安心して仕事が出
来る。あまり無理はするなよ」

「ありがとうございます」

去っていくシグナムさん。

いや、結構キツイ人かと思ってたんだけど、意外や意外。かなり
優しい人なんだよね。面倒見も良いし……。

「さて、今日は何しようかなあ？」

そだ 訓練場の近くの芝生の手入れをしよう
そうと決まれば芝刈り機

ふい〜ん……しゃくしゃくしゃく……

倉庫で芝刈り機を発見した俺は、絶賛芝刈り中
良いねえ。俺もマシンも絶好調だよ

「あ、キスミさん!!」
「んあ?」

呼ばれて振り返ると、青い髪を揺らして走ってくる美少女…新人フ
ォワードメンバーの一人、スバル・ナカジマが目映る。
しかし、機動六課って美人・美少女の存在率高くねえか?
絶対、顔で選んでるっばいんだけどなあ……。

「おんやあ?スバルでねえか」

「おはようございます、キスミさん」

「おう、おはようさん」

「こんな朝早くからお仕事ですか?」

「朝早くって……もう皆、出勤してるじゃねえか」

「あ、そっか」

「アッハッハッハッハッ……クックックック」

「ソコで何で二人とも悪い顔して妙な笑いになるの!?!」

「おおう!!ティアナ……。日に日にツッコミが鋭くなってくるな。

いや、お兄さんは嬉しいよ」

「いえ……私的には嬉しくないんですけど……」

あれ?最高の褒め言葉だと思ったのに……。

……………ん?

「スバル。お前のローラー……」

「へ?」

「だいぶガタが来てるな……。ちょっと貸してみ?」

「あ、はい」

確か持ってたよな……あ、あった

じゃじゃ〜ん!!雑務係必須アイテム、ミニ工具セット〜

よし。芝刈り終了
いや、サツパリしたなあ

「今日はここまで!」

「「「「ありがとうございます!」」」」

アイツらも訓練終わったみたいだな。

「あ、キスミさん!」

ほいほい 皆のヒーロー、キスミさんだよ

「何事? シャーリー」

「今日、この子達のデバイスを実戦様に切り替えようかと思いまし
て……」

「ふんふん」

「で、キスミさんにも立ち会って貰えたらなあって思って……」
「……………何で俺?」

シャーリーとは機動六課に来る前からの知り合い。

本局の技術部に在籍していた時に仲良く(?) なったのだ。

「シャーリー……………」

「キスミ君は雑務係だよ? デバイスの事はそんなに詳しくは……………」

なのはさんとフェイトさんが苦笑してる。

まあ、俺も同意見なんだけどねえ……………。

「あれ? 知らないんですか? キスミさん、B級デバイスマイスター
の資格持ちらしいですよ?」

「「「「「えっ!?!」「」「」」

うわ。なのはさんとフェイトさんとヴィータ副隊長。それにエリオとキャロまで驚いてるよ。

つか、スバル。余計な事は言わんで宜しい。

「ちなみに、なのはさんのレイジングハートさんとフェイトさんのバルディッシュさんのカートリッジシステムの基本機構を考えたのもキスミさんですよ」

「「ええっ!?!」「」

こらこら、シャーリー。君は何でそんなに要らん事を言うかなあ。

「あ、アレってマリエルさんが……………」

「やってくれたんじゃないの?」

「確かに整備、改造を担当したのはマリエル先輩ですけど、当時不安定な技術でもあったカートリッジシステムを組み込むのに、なかなか安全性が保てなかつたんです。で、ソレを考案したのがキスミさんです。まあ、知ってるのは極一部の技術者ですけど……………」

ほら。皆が目を丸くしてる。だから嫌なんだよ……………目立つのは……………。

「シャーリー」

「何ですか?キスミさん」

「よ・け・い・な・こ・と・は、言わなくて良いの」

「きゃあああつ!!痛い!!痛いですよ!!」

必殺アイアンクローをシャーリーにお見舞いしてやったぜ。

ほら、いい年こいて泣かないの!!

「とりあえずパス」

「なんで!?!」

復活速えな、オイ。

「だって、そのデバイスがどんなモンか知らないし、今の俺は雑務係だからな」

じゃあな〜と手を振りながら立ち去る俺。

次の仕事は……寮の風呂掃除でもしますか……。

「お風呂は、綺麗が一番さ〜」

ども 俺は今、寮の風呂掃除の真っ最中

「いや〜。風呂場は綺麗が一番でしょ」
ゴシゴシ……………」

「お風呂は魂の洗濯よ……………な〜んてな」
ゴシゴシ……………」

「ピッカピカ〜 ピッカツ〇ユウ〜」
ゴシゴシ。ピピピ……………ピピピ……………」

ん?通信?誰からだ?

「ピッ はいはい、こちらキスミです〜」

『あ、キスミ君?』

「なのはさん?どうしました?」

なのはさん、何やら慌てたご様子……………何かあったのか?

『今から出勤なんだけど……』
「それは、ご苦労様です」

ビシッと敬礼してみる。
でも、何故に態々俺に報告を？

『その……えっと……』
「？」

何をモジモジしてるんだ？

ガラガラッ！！

「一緒に着いて来て！！」
「ウホッ!？」

ビックリしたあ！！
だってアレだよ？通信してたら急に本人現れるんだから、そりゃビ
ツクリだよ!？

つて……あれ？

この人、今、変な事を仰ってますでした？

「……………え？」

「良いから早くっ!!」

「ちよっ!!待っ!!おわっ!？」

そのまま、なのはさんに襟首掴まれて拉致。

つて、痛い痛い！！引き摺らないで！！首！！首絞まってるから！！

私、キスミ・ハートウエルは生きて帰れるんでしょうか？

「なのはさん！！首！！首が！！」

第三話 ファーストアラート

ババババババババ……

うわぁ 高ぁい お空飛んでるう

つて、何で俺がココに居るのおおおおおおおっ！？

あ、ども

キスミ・ハートウエルです。

前回、なのはさんに連れられて（拉致）今は初出動のフォワードメンバーと一緒にのへりに乗ってます。

「なあ、ヴァイスよ……」

「な……なんスか？」

「何故、こうなった？」

「いや……そんな泣かれても……」

話は少しだけ遡る……

「な、なのはさん……ギ……ギブ……」

「ふえ？……にやあああああぁあつ！？」

引き摺られてボロボロになった俺の姿を見ての悲鳴……取り乱す貴

女も最高です……………ガクッ。

「で、フォワードメンバーの初出勤に何で俺と一緒に？」

「それは…シャーリーが『ぶつつけ本番でデバイス使うから、何かあったら困るかも…』だから、キスミさんを同行させたら良いですよ。』…………て」

はい。シャーリー君の処刑確定。

あとで必殺のアイアンクロー決めちやる。

「ダメ……………かな？」

おおぅ！！そんな上目遣いでチラチラ見ないで下さい！！

そんなんされたら…そんなんされたらボクあ！！

「お供します！！」

で、冒頭に戻る……………と。

「うわあああああつ！！俺のバカバカッ！！」

「自業自得じゃないツスカ」

コラッ！！ヴァイス！！そんな憐れみの目で見るんじゃないやありません！！

「っと、そんなバカやってる場合じゃなかった！！……………なのは隊長

「！！降下ポイントに着きましたよ！！！」

「了解！！ヴァイス君、私も出るよ！！空は私とフェイトちゃん
抑えるから！！！」

「ウスツ！！お願いします！！！」

いや〜。さすがエースオブエース。言う事が違うなあ……………って、
ちよつと待てよ？もしかしてなのはさん、このへりから降下……………
……………？

ガチャン……………プシ……………

ぬあああああつ！？

ハッチ！！ハッチ開けてる！？

「ヴァイス！！ヴァイス！！！」

「何スか！？」

「なのはさん、飛び降りる気！？」

「……………当たり前じゃないツスか」

ソコオオオオツ！！何言ってるの？的な顔してんじゃない！！

「なのはさん！！！」

「？」

振り返るなのはさんの顔を両手で挟み、俺の方を向ける……………向け
るが……………！！

び……………美人やあ……………おっと、イカンイカン。

「無事に……………帰って来て下さいよ」

「ふえ？（にやあああああああつ！こつやっで見ると、キス
ミ君、カッコいいかも……）……はい」

ん？何故かなのはさんの顔が赤い様な……。

「ヒュ〜 ヒュ〜」

「コラッそこ！！冷やかしちゃいけません！！スバルは減点4！！」
「減点!?!」

「ヴァイスは減点30!!」

「下げ幅デカッ!!」

うるさい!!

こっちは真面目になのはさんの心配してるのに……。

「あ……あの、キスミ君？」

「はい？」

「そろそろ離して貰えると嬉しいんだけど……」

「ん？あああつ!!すいません!!」

「き……気にしなくて良いから。じゃ、行ってくるね」

は〜い。いってらっさい。

さて……。

「キヤ〜口〜」

「は!!ハイッ!!」

ん〜、緊張しまくってるなあ……。

ティアナとスバルは……まあ、大丈夫みたいだな。

エリオは男の子だし覚悟も……ガチガチやん。

「つたく……。エリオ、キャロ」

「「？」」

「初出勤……。緊張してるか？」

「は……。はい」

「覚悟は出来てたんですけど……」

「緊張し過ぎは良くないけど、適度な緊張感を持つとけよ。氣い抜いて怪我するよりかはマシだ」

「「ハイッ」」

「キャロ。お前の力は凄いと思うよ。竜召喚……。だっけ？俺は局内で役立たずとかお荷物とか言われてるから、偉そうな事は言えない。でも、キャロの力は優しい力だと思うよ。仲間を助けられる…優しい力。その力で、ティアナやスバル……。エリオを助けてやろうな？」

「は……。はい！！」

「エリオ。お前はフォワードメンバー内で唯一の男だ。根性見せられよっ！！」

「ハイッ！！」

くしゃくしゃと二人の頭を撫でると、へへ…と笑う。
和むなあ……。でも、良い子達だ。

「ん？何笑ってんだよ、ヴァイス」「いや……。意外と面倒見が良
いんだなと思わせて……。プッ」
「うっせえ」
「キスミさんの手……」

ん？どうした、キャロ。

「暖かくて、おっきくて……」

「お父さんみたいでした」

な!?!?.....お父さん.....エリオ君.....ボカアまだ29ですよ?
お父さんって.....お父さんって.....。

「あゝあ、キスミさん泣いちゃった」

「エリオ、キャラ。そこはせめてお兄さんにしとかなきゃ」

ナイスフォローだ、ティアナ。

「さて!!隊長二人が空を抑えてるんだ!!さっさと片付けて来い
!!!!」

いや.....ヴァイス?新人の初出動にその言葉は.....

「「「「ハイツ!!」「」「」

「返事しちゃうのっ!?!」

お兄さん、驚きの連発だよ!?!

で、フォワードメンバーはハッチから降下。

只今、任務遂行中.....つと。

「なあ、ヴァイス」

「はい?」

「俺達は何したら良いの?」

「任務終了まで待機」

「.....こんな空戦真っ只中で?」

「はい」

「……………あ、ガジェットこっち来た」
「おおおおおっ!?!」

見事に回避したヴァイス君。
いや、操縦技術が素晴らしいね。

「ココ、危ないねえ」

「ハア……………ハア……………ハア……………ですね」

「でも、待機?」

「でも、待機です」

「ふ〜ん……………あ、また来た」

「うそおおおおおっ!?!」

またまた回避に成功。
いや、実に素晴らしい。

「ハア……………ハア……………キスミさん」

「ん?」

「アンタも何かしてよ!?!」

「ハツハツハツ。何を言い出すかと思えば……………いいかい、ヴァイス。俺は元々雑務課だったんだよ?六課でも雑務係……………。君は何を期待してるんだい?」

「ですよね〜」

しかし、隊長陣の戦闘って……………。

「すげえよなあ」

「まあ、二人ともエース級ツスから」

「だよなあ」

「ガキんちよ共も頑張ってるツスね」

「だよなあ」

「あ、エリオが落ちた」

「だよなあ」

.....ん？

「落ちたあああああつ！？」

「ヴァイス！！へり近付けろ！！」

「無理ツスよ！！」

「ええいつ！！役立たずめっ！！」

「キスミさんに言われたくねえ！！」

何やってんだ！！あのチビツコはあ！！

な！？だあああああつ！！キャラまで飛び降りやがった！！

「どうすんだよ、オイ！！」

「俺達には、どうしようも無いツスよ！！」

ん？

何かキャラの周りが光だした.....おおっ！！

竜が出てきたぞ！！アレが竜召喚ってヤツか？

「.....なあ、ヴァイス」

「何ツスか？」

「俺達、役立たずだな」

「.....仕方ねえツスよ」

どうやらフワードメンバーの方は任務完了したみたいだな。
空は……………なのはさん達も終わったみたい……………ん？
何やらガジェット一機、なのはさん達に接近……………中？

「まさか……………」

御一方とも気付いてらっしやらない？

……………マジ？

「だああああっ！！もうっ！！ヴァイス！！へり横に向ける！！」

「な！？急にどうしたンスか！？」

「良いから！！早く！！」

「了解！！」

「ムーンアクトレス！！セカンドフォルム！！スナイプモード！！」

【あら、やっと出番？】

「良いから！！」

【オーライ・マイマスター】

つたく！！現場で氣い抜くなんて、どんな神経してるんだ！？

「ヴァイス！！サイドハッチ開けてくれ！！」

「ウスツ！！」

ガチャン……………プシ……………

「間に合えよ……………」

「……………！！ショット！！」

パウン……………

「お疲れ、フエイトちゃん」

「お疲れ様、なのは」

「フォワードメンバーも、終わったみたいだね」

「うん。大丈夫……みたい！？なのは！！うしろ！！」
「え？」

パウン……

キン……ドオン……

（ふえ？ふえええええええつ？終わったと思ってたのに、一機残ってた！？今の狙撃が無かったら、確実にやられてた……でも、誰が？）

「なのは！！大丈夫！？」

「う、うん……」

（……………！！あ……………ヘリでライフル構えてるの……………キスミ君！
？ウソ！？でも……………あれえ！？）

「ナイスショット」

「……………どうも。ムーン、ありがとな。モードリリース」【オーラ
イ】

はあ……………六課の出動……………心臓が悪いよ……………。

「ヴァイス」

「何ツスカ？」

「今の秘密な」

「いや……………それは無理かと」

「なんでさ？」

「……………リアルタイムで映像流れてますから」

「……………なんでさあああああああつ！！」

カチャカチャ……………クイ……………カチャカチャ……………

「よし、問題ないな。ほれ、ティアナ」

「あ、ありがとうございます」

「つぎ、スバル」

「ハイッ」

ん？何してるかって？フォワードメンバーのデバイスメンテだよ。ぶつつけ本番で使ったから、使用後に不具合が無いかチェックしてんの。つたく、こんなのはシャーリーの仕事だろうに……………。

「ほい。次、エリオ」

「ハ、ハイッ」

カチャカチャ……………カパ……………キュツキュツ……………カチャ……………

「キスミ君！！キスミ君！！キスミくうううん！！」

あゝ。来ちゃったよ……めんどくさ……。
カチャ……キュツ……カチャカチャ……
ガンツ!!

「おぶっ!!つつ……。なのはさん、もうちょっと落ち着いて下さいよ」

お陰で後頭部に膝蹴りいただきました。

「ごめんなさい……」

「ほら、問題なし。次、キャロ」

「はい」

キュツ……カチャカチャ……

「んで?何の用ですか?隊長達のデバイスはシャーリーに見てもらってくださいよ?」

「デバイスじゃないよ。さっきの事なんだけど……」

カチャカチャ……

「気にしないで下さい」

「するよ」

「しないで下さい」

「する!」

「ほら、キャロの問題なし。……ハア。俺、目立つのイヤなんですよ。それに、あれは偶々です」

「ウソ!」

「ホントです」

「ウ『キスミイイイイイイイイツ!』……はやてちゃん!」

ほら……めんどくさい事になってきた。

「何でしょうか?八神部隊長」

『隊舎に戻ったら、部隊長室に来いや!!絶対やで!』

「了解しました」

ほらぁ……やっぱり。

コラ、ヴァイス……ストームレイダーの影でニヤニヤ笑ってんじやねえよ……。

減点20だ。

「またっ!?!」

第四話 部隊長室

無事に任務を終えて、六課へと戻ってきた俺達ですが…………。

「俺には、新たな任務が待っていた」

「誰に言ってるンスか？」

黙れ、ヴァイス！！

ああ…………要らん事してもおた…………。

「さ、部隊長室に行こっか」

あの〜、なのはさん？

何故、腕を絡めてくるのかな？かな？

「
〜
〜」

何故か上機嫌のなのはさんと、苦笑するフェイトさん。

むう…………謎だ。

ん？あそこを歩くはシャーリーじゃないですか。

「シャーリー」

「？あ、キスミさん！！どうでした？デバイスのちよ ガシッ へ
？ ギリギリギリギリッ あだだだだだっ！！ア、アイアン！！
アイアンク口オオオオオッ！？」

おうよー!!お前の大好きなアイアンクローだよ!!
ったく、面倒事押し付けやがって……。

「あ……あの、キスミ君?」

「なんですか?フェイトさん」

「シャーリー、変な顔して倒れて……額から煙が出てるんだけど……」

「ああ。大丈夫ですよ。快感に酔いしれてるだけですから」
「か……快感……なの?」

オロオロするフェイトさんも、また美しい!!……いや、可愛い部類に入るな、コレは。

「キスミ君のアイアンクローは快感なの?」

「……味わってみますか?なのはさん」

「にゃっ!!キ……キスミ君の後ろに黒い何かが見えたの……
……遠慮しときます」

「そうですか……チツ」

「舌打ち!?!」

なぐんでアホな会話をしながらも、部隊長室前に到着。

コンコン……

「開いとるで〜」

ガチャ……

「失礼します。チョツチヨ・ロドリゲフ、召集に応じ馳せ参じまし

た!!」

「お疲れ様〜……………つて、誰やねん!! スパアンツ」
「ふおっ!?!」

今日は緑スリツパだと!?!
六課の部隊長は化物か!?!

「全く、ココに入るのにいちいちボケな入れへんのかい……………」
「いや、笑いは生活に必要不可欠かと……………」
「その意見には賛成やな……………ま、ソレは置いといて……………や……………
……………なんでなのはちゃんがキスミ君にベツタリなんやああああ
あああっ!?!」

そんな机バンバン叩いてビシッと指差されても知らんがな。
ちなみに席順は……………なのはさん・俺・フェイトさん。対面に八神部
隊長。

なのはさん、座っても腕は離してくれないのね……………。

「なのはさん?とりあえず離してもらえませんか?」

「イヤ」

「離して……………」

「イヤ」

「はな「イヤ」」

「部隊長室でイチヤイチヤすんなやあああああっ!?!」

八神部隊長、アンタの目は節穴ですか!?!ドコをどう見たらイチヤ
イチヤになる!?!

「なのはさん、離して」

「イヤ」

「……………アイアンクロー」

ビクッ……………ス……………

あ、アイアンクローで離してくれるんだ。メモメモ……………。

「で、話というのは？」

「ハア……………ハア……………ハア……………あ、そうやった！！コレやコレ
！！！」

映し出されたのは、俺がヘリからガジェットを狙撃するシーン……………
……………では無くて、フェイトさんの寝姿。

「……………？」

「？」

「……………はやて？」

「ああああああっ！！間違ってもおた！！！」

「……………はやて？」

「……………ハイ？」

うわ……………フェイトさん、笑顔だけど、めっさ怖えええ！！

「……………没収」

「殺生なー！！」

いや、部下の寝姿を盗撮してる部隊長はダメだと思っうよ？

「コホン……………気を取り直して、問題の映像は……………コレや」

ようやくさっきの狙撃シーンの映像になった。

「コレや!! どういう事が説明してもらおうで!!」
「ん、素晴らしい狙撃ですね。デュー○東○も真っ青」
「誰がゴ○ゴの話しとんねん!!」

ん?なのはさん?何を顔を赤くしてらっしやる?

フェイトさん?何ゆえ画面を食い入る様に観てらっしやる?

「あゝ……偶々です。偶々」

「ほゝ。偶々……ねえ」

「はい。偶々」

「んな訳あるかい!! 揺れの激しいヘリから半身乗り出して、風圧に耐えながらAMFがある飛行型ガジェットを撃ち抜いとるんやで! ? 偶々で済まへんよ!!」

チツ…… 言い逃れは出来なかったか。

「さあ、キリキリ吐いてもらおうで」

「キスミ君、ちゃんと話した方が良いよ。ね?」

「フェイトさんが、そう言うなら……」

「私じゃアカンのかい!!」

「こらこら、机をバンバン叩かない。でも、説明するのも面倒だし……」

「リンディさんにでも聞いてください」

ぶっっちゃけ丸投げ。

ピ……ピ……

「グリフィス君？リンディ統括官に繋いでえな」
『了解しました』

行動早っ！！

『は〜い はやてさん、お久しぶりね〜』

「お久しぶりです」

『あら、フェイトさんになのはちゃんまで お久しぶり〜』

「リンディさん、お久しぶりです」

「うん、お久しぶり…母さん」

『で？どうしたの？何か問題でも起きた？』

「問題って程やないんですけど、彼の件で……」

八神部隊長、身体をずらさないで！！折角見えない角度だったのに！！

『あら キスミ君じゃない お久しぶり〜』

「何でアンタはそんなにテンション高いんだよ？」

『キスミ君。口調、口調』

「口調？口調がどうしたって………どうしたでありますか？」

「いや！！もうムリやから！！」

誤魔化せれなかった……。

なのはさんとフェイトさんが目が丸くなってるし……クッ！！
何が！！ドコでミスをした！？

『で、キスミ君について、何が知りたいの？』

「彼のスキルです。とにかく、この映像を観てください」

『……… あらあ。 やっちゃったわねえ』

「人を憐れみを込めた目で見えるな！！だいたい、アンタこうなる事

狙ってたろ!!」

『バレた? だつてえ、キスミ君何度誘つても首を縦に振らないからあ……』

「振るかっ!!」

だからヤなんだよ、この人と関わるの……。

「で、母さん? キスミ君の事、教えて貰えるかな?」

復活早いな… フェイトさん。

『はやてさん』

「は、はい!!」

『本来なら、キスミ君は六課設立時に入れたかった人なの。でも、本人がなかなか了承しなかったから、今回の辞令になったの』

「あの…… 最初から辞令じゃダメだったんですか?」

『なのはさんの言う事も考えてただけど、本人の意思を尊重したいのと、なにより……』

「… なにより?」

『キスミ君の機嫌を損ねる様な事、したくなかったの』

なんじゃそりや……。

「ど…… どういう事です?」

『はやてさん。キスミ君はハッキリ言つて優秀な人材。彼がその気になれば、どの部署も欲しがると思つわ。目立つ事が嫌いで、雑務課なんて所に居ただけど、本当なら階級だつてもっと上に上げられる人よ』

「過大評価し過ぎたよ」

『あら、そんな事はないと思つわ。ねえ、ムーンアクトレス?』

【リンディ統括官の仰る通りです】

「ふえ？」

「な、何？今の」

「何や？」

『ムーンアクトレス。キスミ君のデバイスよ』

【ムーンアクトレスです。よろしく】

「……………でしゃばり」

【マスターが真面目に仕事をしてれば、こんな事にはならなかったのでは？】

「真面目にしてるよ。雑務を」

『話を戻すわよ。で、キスミ君の経歴やスキル……………だったわよね？』

「はい」

『データに纏めて送るから、それを見て頂戴』

「分かりました」

データに纏めて？

まさか……………。

『非公開分も含めて……………ね』

アンタ、何ばしよっとりますか！？ニヤリと笑うな！！ニヤリと！！人がせつかく面倒事に巻き込まれない様にと秘匿情報扱いにしてもらったのに！！

「非……………公開？」

ぬあう！？

なのはさんの目が光ってる！？

ハッ！！八神部隊長とフェイトさんまで！？

『そうそう キスミ君?』

「あんだよ?」

『ミゼット議長からの伝言 またお茶しましょうね……ですって
じゃ〜ね〜』

ピ……

があああああつ!!

あのアマ、サラツと爆弾投下して行きやがった!!
何考えてんだよおおおおおおおおおおおつ!!

「「「キスミ君」「」

ガシツ×3

ん?

何故、三人とも俺にしがみついて……

「「「逃がさないよ(へんで〜)(なの)」「」

ノオオオオオオオツ!!

怖いよ!!この人達、めがっさ怖ええよ!!

助けて!!誰か………

「助けてええええええええええええええええつ!!」

「ん？今、キスミさんの叫び声が聞こえた様な……………ま、いつか」
ストームレイダーの整備を続けるヴァイス君でした。

第五話 逃走

私こと、キスミ・ハートウエルは無事に部隊長室から撤収致しました！！

あの三人から、どうやって逃げたのかった？

そりゃもう、一人一人に必殺のアイアンクローをぶちかましてですねえ……フヒヒヒヒヒ。

「ったく、冗談じゃないよ。こちらら面倒事は御免だつーのに……」

んで、今は隊舎の廊下をブツブツ言いながら歩いてる訳なんですけど……。

【マスターが真面目に仕事すればいいんですよ】

「あのな、ムーン。俺は平穏な日々を過ごしたいの。分かる？」

【はあ……】

あー！！デバイスなのに溜め息つきやがった！！
生意気なっ！！

ビーツ！！ビーツ！！ビーツ！！

ん？このアラートは第一種警戒体勢！？

また事件でも起こったのか！？

『隊舎内各隊員に告ぐ！！隊舎内に居る最重要人物の身柄を確保せ

をしまして〜」

「そうなのか？」

「はい！！しかも、好きなだけ」

「好きなだけって……また豪気な奴が居たモンだなあ。誰と約束してんだ？」

「八神部隊長です」

「そっかあ 八神部隊長かあ」

……………ん？

「だから、キスミさん……………」

ま……………待て。スバルよ……………。何故、にじり寄って来る？
目が……………目が光って……………。

「大人しく捕まってくださいあああああいつ！！」

「裏切り者おおおおおおおおお！！」

「あ！！居たぞっ！！」

「キスミだっ！！」

見つかった！？

「待てやあああああああああああつ！！」

「アイスウウウウウウウウウウウツ！！」

「キシヤアアアアアアアアアアツ！！」

「あれ！？明らかに変なの混じってるよ！？」

『いてもうたれやあああああああああつ！！』

……………カオスだ。

「えっぐ……ひっ……み……みんながね……ひっく……ぼ……ひ
つく……ぼくを……いじめるの……」

只今、部隊長室で正座で泣き真似中のキスミお兄さんだよ
逃走劇の結果？

んなモン、アレだよ。俺が走るの疲れたから自ら部隊長室に飛び込
んでやったよ。
ざまあみる！！

「キスミ君、大丈夫？」

フェイトさん……こんな俺でも心配してくれるんですね？
貴女は女神です

「キスミ君……そんなに私のお着替え……他の人に見せたくな
かったんだ……でも、キスミ君になら……私……」

はい、無視。

「ようやく確保出来たわ。で？廊下は走っちゃいけませんって、小
学校の時に習わなかったんか？ん？」

「アンタが元凶だろうがっ！！」

何、ダメな子やなあ……みたいな目で見とんのじゃい！！

「さ、話を戻すで」

切り替え早えな。

「ここに、キスミ君の今までの経歴、所有資格、女性関係のデータがある」

「オイ！！明らかにおかしいな情報が混じってるじゃねえか！！どっから入手したんだよ！！」

「はやてちゃん！！」

「なんや？なのはちゃん」

「女性関係のデータ見せて！！」

「なのはさん！？アンタの喰い付く所はソコ！？」

「私も……………気になるかな？」

「フェイトさんまで！？」

「まあ、女性関係は冗談や」

あゝ、良かった。

「チツ！！」

「舌打ちされた！？」

「……………データなんやけど……………うわ！？なんや、これ！？」

そんなに驚く様な内容じゃないと思うんだけどなあ……………。

「……………どうしたの？はやてちゃん」

「……………管理局の部署……………全制覇しとる」

「……………ええっ！？」

なのはさんにフェイトさん……………そんな駆け寄ってまで見るモンじゃないでしょ……………。

「うわ……ホントだあ……」

「凄い……」

「ハッハッハッ!!」

「威張るな!!……資格は………は？」

あゝ、八神部隊長の目が点になってる。

「何や……この数は……。大型自動二輪・普通自動車から戦技教導官、空戦戦技教導官、近接格闘教導官、デバイスマイスター、機械整備士……。私が知らん資格まであるやんか」

「あ、執務官資格まで……」

「ふえええええ……」

「しかも、二輪と自動車以外が秘匿事項扱い……どないなつとるんや……」

あゝあ。バレちゃったよ……。

リンディさんも余計な事をしてくれる……。

「……でも……」

ん？

「ッ!？」

あれ？どうしたのかなあ？

三人とも、まるで『獲物』を見つけた肉食獣の様な眼をしてらっしゃいますが……。

「クツクツクツ……使える………使えるでえ……」

「フォワードメンバーの訓練と一緒に……」
「コレだけ資格を持つてるなら………うん」

ヤバッ!!

面倒事の匂いがプンプンしてきた!!

「キスミ君、明日からなのはちゃんと一緒にフォワードメンバーの
訓れ「お断りします」なんでや!？」

「めんどくさい」

「ぶつちやけすぎやわ!!」

「キスミ君……」

「何ですか?なのはさん」

「私と教導するの………イヤ?」

ぐはっ!!

そんな瞳をウルウルさせて俺を見ないでくれ!!

「……………イヤ?」

頼む!!

これ以上は!!これ以上はあああああっ!!

だがしかし!!俺もバカじゃない!!ココで流されたら出勤前と同
じじゃないか!!

「お……………お断り……………します」

ヨシッ!!良くやったぞ、俺!!

「私からもお願い……………ダメかな?」

な……なん……だと！？
フェイトさんまで参戦！？
やめろっ！！やめてくれっ！！そんな……そんな瞳で俺を見ないで
くれっ！！

「う……くっ……」

耐えろっ！！耐えるんだっ！！

「私からもお願いや……ダメ？」

「お断りします」

「早いわっ！！そんなにウチが嫌いか！！」

「いえ、大好きです！！」

「え……あ……その………おおきに」

「冗談です」

「シバくぞ、アホんだらあ！！今のドキドキ返せやあ！！」

クツクツクツクツ……

あゝ、からかうの面白れえ

ま、あまり苛めるのも可哀想だしな。

「ハア……。分かりました。たまになら良いですよ」

「ホント？」

「なのは、良かったね」

「ただし、前もって言うてください。急に引っ張り出されるのは勘
弁です」

「約束します」

「じゃ、自分はこれで失礼します」

さて、雑務に戻りますか……。

ガチャ……

「あ、そうだ。八神部隊長」

「何や!!」

「さっきの、本音ですから」

「ひあつ!?!」

「さて、コーヒーでも飲んで、仕事しますか」

【マスター】

「どした? ムーン」

【さっきの……本当?】

「ん? ああ……… 弄りキャラとしては大好きだな」

【…… 呆れた。八神部隊長、可哀想に】

「クツクツクツ……」

【いつか絶対、痛い目みるわよ?】

「その時は、逃げ切ってみせるさ」

あの後、なのはさんがレイジングハートを振り回しながら追い掛け

てきた。

俺、何かしただろうか？

「キスミ君、待ちなさあああああい！！！」

「イヤですよおおおおおっ！！！」

今日は何だか走ってばかりだ……………。

第六話 意外な過去（前書き）

ども

黒龍妃です。

久々にキスミ君の話を更新です。

彼には今後も頑張って貰わねばと思っています。

読者様からのご感想をお待ちしております

第六話 意外な過去

「トイレットペーパーの補充よろしっ!!」

あ、ども

今日も雑務を頑張ってるキスミ・ハートウエルです。

現在のミッションは、トイレの備品補充であります!!

さて、次は三階のトイレに……あ!!あそこに見えるは、ヴィー
タ副隊長じゃありませんか!!

早速、接近するであり……。

「ん?キスミじゃねえか」

ぐはあっ!!せ……接近前に見付かってしまった……orz

「なっ!?!オイ!!大丈夫かつ!?!」

「だ……大丈夫です」

副隊長……今はその優しい言葉も、俺の胸に突き刺さるぜ……。

「キスミ……」

「ん?何ですか?ヴィータ副隊長」

「ちよつと話があるんだけど……時間良いか?」

ん、あと三階の分の補充があるから……

「20分程待つて貰えますか?まだ少し仕事が残ってるんで……」

「ああ、構わねえ。じゃあ……」

「あ、外の自販機の所で待ってて下さい。すぐに行きますんで」「分かった!!」

ありゃりゃ……。ヴィータ副隊長、走っていつちゃった……。んじゃ、さつさと残りを片付けますか。でも……話って何だろ？

「すみません。お待たせしました」

「いや、アタシが誘ったんだから気にすんな」

「で、話って何ですか？」

「ああ……。あのさ……」

ん？ヴィータ副隊長がモジモジしながら俯いて……。はっ!!まさか、ヴィータ副隊長からの愛の……!?

「なあ、お前……前にアタシと会った事あるか？」

き……。来たのか!?以前、自分との邂逅をほのめかす台詞!!いや!!落ち着け!!落ち着くんだけスミ!!ココで選択を誤ったらバッドエンドルート!!

「俺も管理局員ですから、何処かで会った事位はあると思いますよ?」

ヨシッ!!無難な回答!!コレで相手の出方を見て、その後の対応を……。

「……………数年前、なのはが初めて墜ちた時……………」

……………ぎくっ

「と……………突然どうしたんですか？そんな話をして……………」

「なのははその時、大怪我をしたんだ……………アンノウンに襲われて……………」

……………ギクギクッ

「その事件なら知ってますよ。管理局内でも話題になりましたから」

「で……………だ。その時、近くに居た武装隊の隊員の一人が、なのはを庇って怪我したんだよ……………。ソイツが庇ってなきゃ、なのはは命を落としてたかも知れねえ……………」

「そんな事実があつたんですか……………あ、タバコ吸っても良いですか？」

「あ？構わねえよ。……………その武装隊員……………お前に似てんだよ」

ポロ……………」

あうっ……………くわえてたタバコが落ちちまった！！

「今のお前みたいにタバコくわえてさあ……………なのはとアンノウンの間に入って……………獰猛な笑みを浮かべて『ヴィーター！俺は良いから、高町を救護隊に！！早くっ！！』……………て叫んでた。自分も怪我してんのに……………。あの声と台詞……………そして、あの笑みは忘れねえ。忘れられねえ」

「その隊員と俺が似てるんですか？」

「ああ……………。顔と声がな。その隊員はなのは以上の重傷を負って入院。その後は……………どうなったかワカンねえんだ」

今さら……………そんな昔の話を……………。

「なあ。あの時の隊員はお前なんじゃねえのか？」

「ヴィータ副隊長……………。俺は目立つ事も面倒事も避けたいダメな局員ですよ？そんな俺が……………」

「ソイツはその時、腹を……………怪我したんだ！！」
「バツ！！」

「ちよつと！？ヴィータ副隊長！！何を！？」

「！！……………この傷痕……………やっぱりお前」

バレちゃったよ。

せつかく隠してたのに。

「いきなり服をめくるなんて、セクハラですよっ！？」

「うるせえっ！！何だよ、この傷痕は！？やっぱり……………やっぱりお前じゃねえか！！」

そんなに泣きながら叫ばなくても……………。

端から見たら、俺がヴィータ副隊長を泣かしてる患者みたいじゃん。

「ヴィータ副隊長……………」

「な……………なん……………何だよ」

「俺なんか怪我しても、悲しむ人は居ません。だけど、なのはさんは違う。家族や多くの仲間…友達が悲しみます。あの位の怪我で済んで良かった」

「でも……………でも、お前は！！……………あ……………」

頭を撫でたら落ち着くかなあ？……………あ、ヤバい。昔を思い出したら、顔が自然に……………。

「その獰猛な笑み……………あの時の……………」

「グイータ副隊長。昔の事じゃないですか。随分と時が流れた……………。俺は後悔してませんよ。なのはさんも、過去の過ちを糧に……………教訓にして指導をしてるみたいですし」

「でもよお……………」

「忘れましょうよ。あの事件で、管理局の看板『不屈のエース』が誕生したんです。またなのはさんが空を飛べる様になった……………それで良いじゃないですか」

「お前は……………お前はそれで良いのか！？なのはとアタシのせいだ、怪我して！！色々言われたんだろ！！知ってたんだからな！！」

さて、仕事に戻ろつと

昔の話なんて興味ねえよ。時間は……………過ぎた時は戻らねえんだから。

「グイータ副隊長。確かに当時は色々と言われましたよ。でも、それだけですから……………。昔に縛られず、貴女達は……………自由に空を舞って下さい。……………仕事に戻りますね」

「アタシに！！……………アタシに出来る事なら、何でも言ってくれよ！！罪滅ぼしじゃねえっ！！アタシは……………アタシはあの時、キスミに惚れたんだからなっ！！」

……………なんですとっ！？

あ……………グイータ副隊長、顔が真っ赤。

「……………マジ？」

「あ……………。あの時から、アタシはお前に憧れてたんだ。何の躊躇もなく、身体を張って仲間を護れるお前に……………」

「……………意外なカミングアウト。さすがの俺もビックリです」

そりゃそうだろ!?

突然、あんな事言われたらビックリするって!!

「アタシも仕事に戻るよ。キスミ、今度からは、もっと砕けた接し方をしてくれよ?」

あ……………走って行っちゃった……………。

あゝ、どうしよ?

ガサ……………

ん?……………誰か居たのか…な?

ま、俺も仕事に行こう。

「キスミ」

「どうしました? ヴィータ副隊長」

「何でお前はそんなに堅いんだよ」

「仕方がないでしょ? 癖なんだから…」

「それにしたつてよ」

午後から外の草むしりをしていた俺。

フォワードメンバーの訓練が見える場所で仕事してたんだけど、俺を発見したヴィータ副隊長がダッシュで接近。それに気付いた俺が逃走しようとしたけど、見事に捕獲されました。

で、ヴィータ副隊長は俺の首にぶら下がってます(泣)

「仕事の邪魔です。ヴィータ副隊長も仕事に戻って下さい」

「つめてえなあ……。ちょっと位良いじゃねえか」

「ほら、なのはさんが睨んでますよ。主に俺を。……。俺!？」
「アタシに被害は無いから大丈夫だ」

な……。なんて台詞を!!

ヴィータ副隊長、なんて恐ろしいコ!!

ほら、なのはさんが近付いてますよ!! レイジングハートを振りかぶって……。振りかぶって……。!?
どごおっ!!

「あ!! 危ないじゃないですか!! なのはさん!! 避けなきゃ直撃でしたよ!？」

「キスミ君は、何をしてるのかな？」

「草むしりです」

「素敵なアクセサリーを首から下げてるね？」

「最近、購入しました。何なら、なのはさんにお譲りしますよ？」

「譲られる気はねえよ」

「ちよっ!？ヴィータ副隊長!？」

「なのは。アタシとキスミの間には、誰にも割り込めない過去があるんだ!！」

はああああああつ!？

アンタは何、命知らずな言葉を!!

「どつという事かな?かな?」

あ、なのはさんが壊れ始めた……。。

「私も知りたいな?」

ん？

ぎゃあああああつ！！

いつの間に後ろにフェイトさんが！？

ヤバい！！ヤバい！！俺の中でアラートが鳴りっぱなしだ！！

「なのはさん！！フェイトさん！！」

こ……この声は……ヴァイス！！

「どうしたのかな？ヴァイス君」

「何？ヴァイス」

「キスミの過去……それは詮索しちゃならねえ……」

おおっ！！ヴァイスが援護を！！今まさにお前は俺にとって英雄だ！！輝いて見えるぞ！！

「男の過去！！それは「ヴァイス君……少し黙ろうか」「静かにしようね？ヴァイス」サー！！イエッサー！！」

弱っ！！弱すぎだよっ！！

お前、何、見事な敬礼やってんのさ！！

「さ……キスミ君？私とヴィータちゃん……どちらが大切？」

「あれ？なのは……その言い方だと、私が入っていないよ？」

「フェイトちゃん……。これは私とヴィータちゃんとキスミ君の問題だよ？割り込まないで欲しいかな？」

こええよおおおおおおおっ！！

何だか、なのはさんとフェイトさんの間に不可視の火花が！！

こんな所に居たら、命が幾つあっても足らねえ！！

「ここは………逃げる!!」

「あつ!!逃げた!!」

「追い掛けるよ、なのは!!」

「うん!!」

こんな時だけ連携が最高じゃねえか!!

逃げる!!逃げ切ってみせるさ!!

俺、やれば出来る子!!頑張れ!!

「キスミ」

「あれ!?まだくつついてたの!」

「うん」

「アンタが原因だからね!」

「キスミがアタシの為に……」

「違うからね!?素敵な勘違いしないでね!」

あああああああつ!!疲れるっ!!

第六話 意外な過去（後書き）

いや〜。

キスミ君の意外な過去…。

しかし、彼はどの位の實力を隠してるのでしょうか？

実は作者にも良く分からなかったりする…（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3671o/>

魔法少女リリカルなのはsts ~機動六課のどたばた騒ぎ~

2011年1月10日11時35分発行